卒業論文最終発表　2021.11.11

本寺地区における集落構造の形成要因と持続性

中谷礼仁研究室千年村ゼミ 1X18A009 安東舜一

目次構成

第１章　本研究について
1-1. はじめに　動機・背景
1-2. 研究の目的
1-3. 研究の方法
1-4. 本研究の位置付けと既往研究
　1-4-1. 日本史・中世史
　1-4-2. 歴史地理学
　1-4-3. その他
　1-4-4. 集落構造の変容を追う研究
1-5. 本研究の基礎情報
　1-5-1.「骨寺」と「本寺」
　1-5-2.「散村」
　1-5-3.「路村」と「街路村」
　1-5-4. 本寺の概要

第２章　骨寺村の成立と開発
2-0. はじめに
2-1. 自然環境条件
　2-1-1. 地形
　2-1-2. 骨寺村成立の二段階説
　2-1-3. 原初の稲作共同体
2-2. 中世骨寺村の成立
　2-2-1. 中尊寺文書にみる骨寺村
　2-2-2. 中尊寺との交易・交通
2-3. 陸奥国骨寺村絵図
　2-3-1. 二種類の絵図
　2-3-2. 屋敷、田畑の分布
　2-3-3. 絵図の中央軸
2-4. 小結

第３章　本寺の開発
3-0. はじめに
3-1. 近世の本寺
　3-1-1. 磐井郡西岩井絵図
　3-1-2. 屋敷分布の変遷
3-2. 近代以降の本寺
　3-2-1. 近代における本寺の開発
　3-2-2. 明治字限図、および現況との比較
3-3. 昭和航空写真との比較
3-4.　小結

第４章　本寺地区の景観分析
4-0. はじめに
4-1. 引き継がれた景観要素
4-2. 街道沿いに屋敷が集中した要因
　4-2-1. 水田の存在
　4-2-2. 道と玄関の向きの関係
　4-2-3. 水路と屋敷構え
4-3. 散村としての本寺
　4-3-1. 灌漑システム
　4-3-2. 屋敷の配置・平面構成
4-4. 小結

第５章　考察

第６章　結論

第１章　本研究について

○研究の動機・背景

岩手県一関市厳美町本寺地区は、かつて「骨寺村」と呼ばれた中尊寺領の荘園であった。絵図を含め豊富な史料に恵まれており、また現在の景観にも中世以来の伝統が見られることから、多くの研究者を惹きつけてきた。しかし、数多くある骨寺村研究論文の中で、建築学分野からの論文は、景観保全やまちづくりに関するごく一部の例外を除けば皆無である。

では、本寺地区の集落形態はどのように形作られているだろうか。現在の本寺地区の屋敷分布を見てみると、集落を横断する国道に沿って列状に屋敷が立ち並んでいる。これは中世の絵図である「陸奥国骨寺村図」に描かれた屋敷分布とは明らかに異なる。

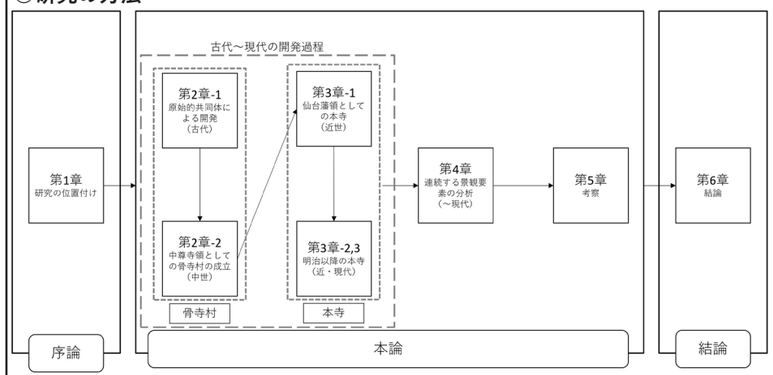
つまり本寺地区は中世以来の景観が受け継がれていると謳われているものの、集落形態においては何らかの要因によって変容を遂げているのである。本論文は現在の屋敷分布や屋敷の構成に着目し、その変遷を追うことで、表層として現れる景観を構造的を捉え、古代から現在にかけてどのように生存環境が持続してきたかを明らかにする。

○研究の目的

・本寺地区の開発過程を古代から現代にかけてまとめる。
・景観の変遷から、本寺地区の路村的側面と散村的側面について分析する。
・本寺地区の集落構造の特性を明らかにする。

以上のことから、**現在の屋敷分布や屋敷の構成に着目し、その変遷を追うことで、集落景観を構造的を捉え、古代から現在にかけてどのように生存環境が持続してきたを明らかにすることを目的とする。**

○研究の方法



○既往研究

・入間田宣夫（2019）『中尊寺領 骨寺村絵図を読む－日本農村の原風景をもとめて－』，高志書院 .
・吉田敏弘（2008）『絵図と景観が語る骨寺村の歴史－中世の風景が残る村とその魅力－』，本の森 .
・一関市（2007）『一関本寺の農村景観保存調査報告書』.
・岡陽一郎（2019）『大道　鎌倉時代の幹線道路』，吉川弘文館 .
・一関市教育委員会（2004）『岩手県一関市埋蔵文化財調査報告書第５集　骨寺村荘園遺跡』.

これらの既往研究では、地形環境や中世的景観の復元・開発に関する研究は行われているものの、現在の集落形態に至までの変遷を連続的かつ構造的に論じたものはない。
本研究では集落形態の編年分析を行うにあたり、他分野にわたる先行研究を網羅的に扱った。

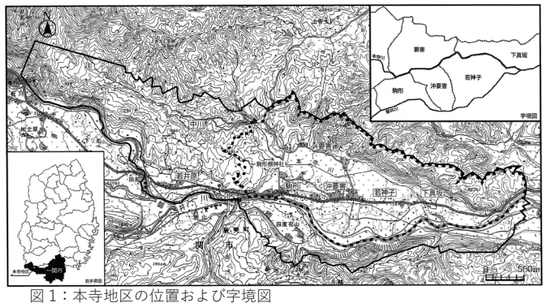


図１：本寺地区の位置および字境図

第２章　骨寺村の成立と開発

2-1. 自然環境条件

2-1-1. 地形

本寺地区は、栗駒山（宮城県）から東に流れる磐井川左岸に形成された段丘盆地で、周囲を低い丘陵に囲まれた地形となっている。平野部の標高は 150m ほどであり、磐井川はそこから 25~30m ほど低い崖下に流れているため、氾濫による被災の記録はない。逆に山王山（本寺より東に約 5.5km）を水源とする本寺川は、暴れ川として度々氾濫を繰り返した。そのため、昭和 58 年（1983）に、河岸改修工事が行われたことで、河道は整形され、河床は掘り下げられた。本寺川は集落内部を東西に流れ、集落東端付近で磐井川に合流する。これは絵図でも同様である。

図２：本寺地区標高区分図（一関市作成）、平野部が傾斜しているのが分かる。

2-1-2. 骨寺村成立の二段階説、2-1-3. 原初の稲作共同体

2-2. 中世骨寺村の成立

大石直正「中尊寺領骨寺村の成立」(1984)・吉田敏弘「骨寺村絵図の地域像」(1989)の２本の論文によれば、灌漑方式や信仰の存在から、この地には中尊寺支配以前から定着していた農民が存在し、中尊寺領化による開発に伴って「骨寺村」が成立したと述べられている。この説は「骨寺村成立の二段階説」と呼ばれる。そして、平塚ら（2012）の磐井川旧河道地を対象にした花粉分析によって、915 年に降下した火山灰の上層からイネ花粉が検出、同時期に水田に生息する水生植物の増加が認められたため、首人（おびと）をリーダーとした古代「原始的共同体」の存在する可能性は高く、**この地では古代から稲作が行われていたとみられている。**

2-3. 陸奥国骨寺村絵図

南側を流れる磐井川、集落中央部を流れる本寺川（図中では「檜山川」）、西側栗駒山などが表現されている。実際には沢と言ってもいいほどの小川である本寺川が強調されているのは用水源としての意識の表れであると考えられる。**屋敷は散らばっており、水田とセットで描かれているものが多い。**

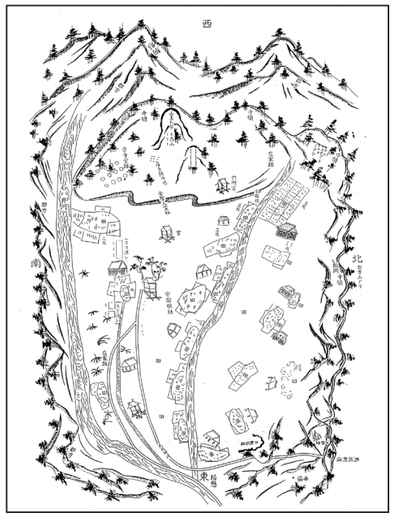


図３：陸奥国骨寺村絵図（詳細絵図）のトレース図

第３章　本寺の開発

3-1. 近世の本寺、3-1-1. 磐井郡西岩井絵図

新たに「本寺」と呼ばれるようになったこの地には、江戸時代に描かれた絵図が存在する。水田が本寺川を中心に広がっている。この絵図は後に本寺の用水を大きく改良することになる「下り松用水」開削前のものである。

3-1-2. 屋敷分布の変遷

吉田（2008）によると、江戸時代の享保期から天保期にかけて、屋敷が街道沿いに集中する傾向がみられる。これは、磐井川から取水する下り松用水開削の水利改良によって水田の拡大が可能となったことが間接的な理由とされる。また、道沿いを選ぶのは交通上の利便向上のためだとも言われる。しかし、次章で述べるように、**積極的に街道沿いを選んだとは考えにくい。**

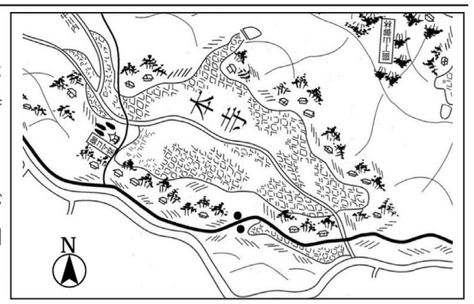


図４：磐井郡西岩井絵図（本寺部分抜粋）のトレース図

3-2. 近代以降の本寺

3-2-1. 近代における本寺の開発

明治時代を迎えた本寺において、景観に影響を与えた開発事項として、**「院内街道」**の開削と**「磐井川発電所」**の建設が挙げられる。院内街道は現在の国道 342 号線の前身となる道路で、宮城県と秋田県を繋いでいる。

磐井川発電所は、崖下の磐井川と平野部の高低差を利用した水力発電所であり、その余り水が本寺西部の水路を経由して本寺川に流し込まれた。これは隣町の用水事情をも改良するほどの大用水源であった。

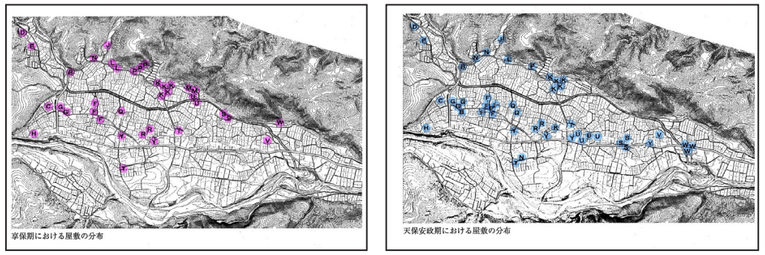


図 5,6：享保期から天保期にかけての屋敷分布の変遷。屋敷が街道沿いに移転しているのが分かる。

図 7：明治期の土地利用パターン

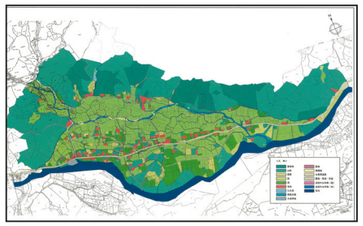


図 8：現代の土地利用パターン

3-2-2. 明治字限図、および現況との比較

明治期になると、ほぼ現在と土地の形状が比較可能な精度の地図が存在する。明治中期作成の地籍図と現況の比較研究によると、土地利用パターンは現況とあまり変化がない。一方、水田 1 枚 1 枚に注目すると、かなり畦畔の直線化が行われていることが確認できる。昭和空中写真と現況の比較でも同様の傾向が見られる。

第 4 章　本寺地区の景観分析

4-1. 引き継がれた景観要素

・本寺は、「本寺川から取水して水路を通じて集落全体に配水する」という用水系統を守りながら様々な開発が進められてきた。

・田と屋敷をセットで管理する中尊寺による支配形態である「田屋敷」は、骨寺村が中尊寺の荘園でなくなってもなおその形態だけ保存された。

・微地形や傾斜した台地に対応した小区画水田と、それに有利な田越し灌漑システムも現在に受け継がれている。

4-2. 街道沿いに屋敷が集中した要因

いくつかの先行研究によれば、街道沿いに屋敷が集中したのは「交通上の利便向上」とされている。しかし、それ以前に上述したような**用水系統などの保存が優先された結果なのではないか。**この仮説の検証を次の 3 節で行う。

4-2-1. 水田の存在

屋敷移転が見られる享保～天保期は、飢饉や分家による戸数増に対応するため、開田の努力が行われたはずであり、**水田を潰して屋敷地にすることは考えにくい。**

図 9：現在の本寺地区の空中写真

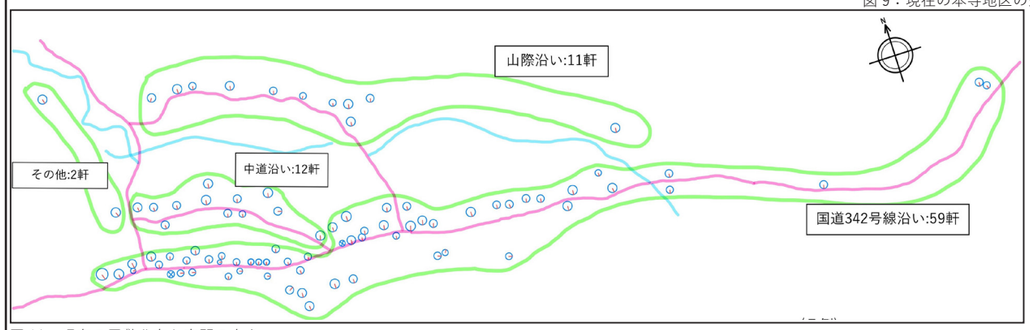


図 10：現在の屋敷分布と玄関の向き

図 11：図 10 の凡例

4-2-2. 道と玄関の向きの関係、4-2-3. 水路と屋敷構え

図 9 は現在の本寺地区の家の玄関の向きを表した地図である。表 1 はその集計表で、基本的に南を向いていることが分かる。街路に強い中心性が働いている街路村として、「砺波平野＜増山＞」（黒野・菊池 2000）と比較すると、**街路の中心性よりも玄関を南向きに建てることを優先している**と言えるため、道に対して平面を開く意図は弱いと言える。また、各屋敷の水路利用は個別的な利用にとどまり水路に対して玄関が向き合うなど、集落全体としての傾向は見られなかった（図 12）。

	南	東	北	西
国道	50	8	1	0
中道	11	1	0	0
山際	11	0	0	0
その他	2	0	0	0
合計	74	9	1	0

表 1：領域別玄関の向き

4-3. 散村としての本寺

集落構造の仕組み自体は散村であることを、既往研究をもとに記す。

4-3-1. 灌漑システム

寒冷な本寺地区の伝統的な灌漑方法として、「田越し灌漑」がある。用水路から引いた水を、水源に近い田から少しずつヌルメて次の田に導く方法である。寒冷地である本寺地区においては有効な伝統的灌漑技術であり、現在も用いられている。これには**小区画水田かつ個人の所有田が広くまとまっている**必要がある。つまり、散村であるからこその灌漑システムであり、これが現在も受け継がれているということは散村としての側面を持っていると言える。

図 12：土水路と玄関の向き

4-3-2. 屋敷の配置・平面構成

屋敷の配置や平面にも、散村としての本寺の特質が表れている。最も顕著なのは屋敷の西側と北側を覆う**防風林（イグネ）**の存在である。これは、栗駒山から吹き下ろす冷涼な風から屋敷を守り、夏には西日を遮る効果がある。また、防風林の中には墓石やミョウジンサマ（明神様）という屋敷神の石祠が確認できる。伝統的屋敷は主屋の周囲に土蔵、馬小屋、物置などが置かれ、畑やビニールハウスで自給用の野菜の栽培が行われていた。また、生活用水をすべて敷地内の井戸水で賄っている屋敷もあった。このように、各屋敷の敷地内で生業や信仰、生活が完結させられる構成になっており、散村としての特質が現れていると言える。

以上より、4 章を通じて、本寺は従来の用水系統を維持するために散村としての仕組みを保ちながら路村的形態を取ることになったと言える。

第 5 章　考察

本寺地区は、用水事情の改良による水田拡大を繰り返していくなかで、結果的に**「散村の仕組みを持ちながらも路村的形態を取る」**ことになった。しかしそれは未開発の土地を屋敷地として開発するという**消極的な選択の積み重ね**であって、街路の中心性によるものではない。積極的な開発ではなく、あくまでも従来の仕組みを維持するという姿勢が、現在の景観にも表れていると言える。

第 6 章　結論

本寺地区では古代から現代に至るまで持続的な集落経営が営まれてきたこと、そしてそれが現在の景観形成に影響していることを確認することができた。

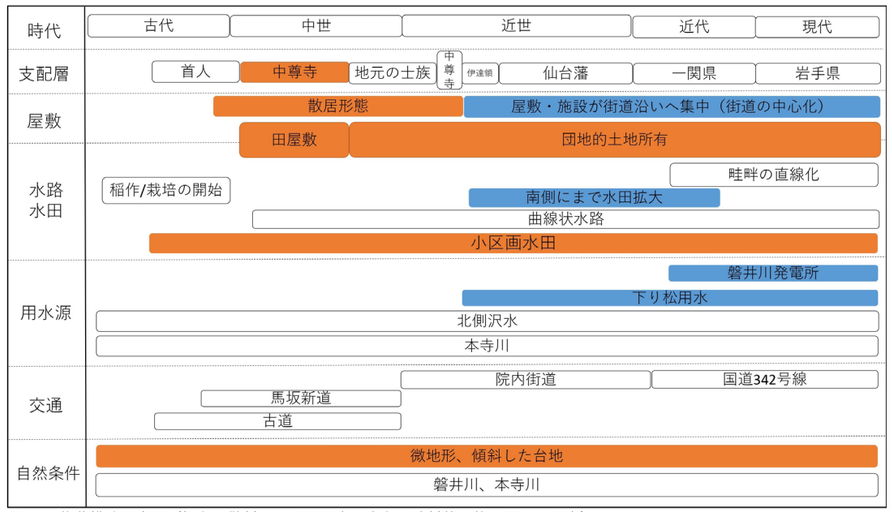


図 13：集落構造の変遷（橙色：散村としての要素、青色：路村的形態に関する要素）

【参考文献】
・入間田宣夫（2019）『中尊寺領 骨寺村絵図を読む－日本農村の原風景をもとめて－』，高志書院．
・吉田敏弘（2008）『絵図と景観が語る骨寺村の歴史－中世の風景が残る村とその魅力－』，本の森．
・岡陽一郎（2019）『大道　鎌倉時代の幹線道路』，吉川弘文館．
・一関市（2007）『一関本寺の農村景観保存調査報告書』．
・一関市教育委員会（2004）『岩手県一関市埋蔵文化財調査報告書第 5 集　骨寺村荘園遺跡』．
・東北芸術工科大学東北文化研究センター編（2014）『東北一万年のフィールドワー本寺　山間に息づくむらの暮らし』．
・黒野 弘靖，菊地 成朋（2000）「街路村における街路と水路の中心性と屋敷構えとの関係：砺波散居村における居住特性の分析 その 4」，『日本建築学会計画系論文集』，65 巻 537 号，pp.165-170.
・竹原万雄（2017）「近世・近代における本寺の人口・景観・生業の変遷」，『骨寺村荘園遺跡村落調査研究総括報告書』，一関市博物館編，pp.86-96.
・平塚 明ほか（2012）「IV．一関厳美町本寺地区岩井川左岸の旧河道における花粉分析」，骨寺村荘園遺跡自然調査研究班，『骨寺村荘園遺跡村落調査研究自然関係調査業務報告書』．

【図版出典】
図 1,4：『東北一万年のフィールドワーク 11　本寺　山間に息づくむらの暮らし』より
図 2,8,12：『一関本寺の農村景観保存調査報告書』より
図 3：『骨寺村荘園遺跡村落調査研究総括報告書』より
図 5,6：『絵図と景観が語る骨寺村の歴史』を元に筆者作成
図 7：『絵図と景観が語る骨寺村の歴史』より
図 9：地理院地図
図 10,11,13：筆者作成